

(海外最新事情)

イギリス

(1) 北アイルランド自治政府

2007年5月8日、4年7ヶ月にわたって凍結されていた北アイルランドの自治政府が復活した。英国領としての残留を主張する民主統一党 (Democratic Unionist Party) と英国からの独立 (アイルランド共和国との統合) を求めるシン・フェイン党 (Sinn Féin: アイルランド語で「私たち自身」の意) による連立政府が発足し、前者の党首イアン・ペイズリーが首相、後者の幹部の一人マーティン・マクギネスが副首相に就任している。

北アイルランドでは長年にわたって紛争が続いていた。これは一面では、英国領残留を望むプロテスタント (イングランド国教会、長老派、メソヂストなどを含む) と英国からの独立を望むカトリックの宗教的対立でもある。英国王ヘンリー八世が1541年にアイルランドに植民を開始し、清教徒革命後の1652年にはオリヴァー・クロムウェルがアイルランドを事実上の植民地とし、ジョージ三世時代の1801年にアイルランドは英国に併合された。1840年代後半には大飢饉によって人口が半減し (多くが米国へ移住)、1905年にシン・フェイン党が結成されて独立の機運が高まり、1916年のイースター (キリスト復活祭) の日にダブリンで「イースター蜂起」が起こり、1922年に英国の自治領アイルランド自由国として独立を果たす。アイルランド自由国は1949年に、現在の国名であるアイルランド共和国 (英語名 The Republic of Ireland、アイルランド語名 Eire) に改称され、この時に英連邦 (The British Commonwealth) から脱退している。

アイルランド自由国成立を巡る内紛の結果、イングランドやスコットランドからの移民 (すなわ

ちプロテスタント) が多かった北部の六州は英国領に留まることとなり、現在の北アイルランドとなった。それ以来この地域のカトリック教徒が独立を求め、特に過激派のアイルランド共和軍 (Irish Republic Army. 略称 IRA) がテロ活動を続け、プロテスタント過激派のアルスター義勇軍 (Ulster Volunteer Force. 略称 UVF) もまた対抗して同様な活動を展開していた (アルスターとはアイルランド島北部地方の呼称で、北アイルランドの六州と共和国のドニゴール州がここに含まれる)。北アイルランドの首都ベルファースト (造船で有名な工業都市。タイタニック号はここで製造された) にはこの両陣営の拠点が置かれ、一般の住民もプロテスタントの居住地区とカトリックのそれとに分かれて生活している。1972年1月30日には (ロンドン) デリー (北アイルランドの第二の都市。元々の地名は「櫛の森」を語源とする「デリー」だったが、17世紀初頭にジェームズ一世が勅許を与えてロンドンの商人を大勢ここに移住させたとき「ロンドンデリー」に改名された。今でもプロテスタント住民はこの街をロンドンデリーと呼び、カトリック住民はデリーと呼ぶ。本稿では中立を保つため、「(ロンドン) デリー」と表記する) で独立運動家が26人、英国軍に射殺された。この事件は「血の日曜日」 (The Bloody Sunday) と名付けられ記憶されている。

このように長年にわたって対立が続いていた北アイルランドのプロテスタントとカトリックだが、1998年4月10日には「ベルファースト合意」 (Belfast Agreement. 「聖金曜日合意」 Good Friday Agreement とも) によって停戦と武装解除、英領残留と自治権確立、アイルランド共和国政府との共同評議会の設立、国民投票の実施が取り決められ、両陣営のすべての政党が参加する北アイルランド議会が成立した。この合意に尽力したアルスター統一党党首デイヴィッド・トリンブルと社会

民主労働党党首ジョン・ヒュームにはノーベル平和賞が授与されている。だがその後、IRAの期限内の武装解除が実行されず、2002年10月から自治政府が機能停止して再び英国政府によって直轄統治が行われる状態が続いていた。今年の3月26日に、5月8日からの自治政府再開が合意されたのだった。

(2) 少年たちのための読書案内

2007年5月16日の『タイムズ』に、13歳から19歳までの少年たち (teenage boys) のためのお勧め本リストが掲載されている。これは教育相アラン・ジョンソンが始めた読書習慣普及活動の一環で、60万ポンド (約1億4千万円) の予算が組まれ、英国中のすべての中学高校にこのリストに掲載された167作品の中から任意の20冊が無料で贈呈されるという。

なぜ「少年たち」に限定されているかということ、英国では何年か前から中等学校における学力の男女差が深刻化しているからであり、その原因は少年たちの多くがあまり本を読まないことだからである。ジョンソンも明言しているように、読書量は国語 (つまり英語) のみならずあらゆる科目の学力に直結するのである。学力の男女差はこの国の大学入試の結果に如実に表れていて、Aレベル (大学入試の全国共通試験) の学校別成績順位では上位20の大半を、女子パブリックスクールが毎年占めている。このことを伝える数年前の新聞記事 (手許にないので出典を明記出来ない) の分析では、男子生徒の間に勉強や読書を「女々しいこと」と考える風潮があり、勉強など出来ない方が「格好いい (cool)」という考え方が蔓延しているせいでもあるという。

本を読まない少年たちの多くはおそらく、読書が根っから嫌いなのではなく、単に読書の面白さを知らないだけなのであろう。このリストは彼らに読むことの面白さを実感させることに主眼が置かれていて、それゆえに古典文学の必読書よりも親しみやすい「面白い」本が優先されている。たとえばシェイクスピアやミルトンはもちろんのこと、オースティンやディケンズの作品さえも含ま

れておらず、科学知識や雑学に関する本や日本製の「マンガ」 (外来語として 'manga' で通じる) が入れられていたりする。いわゆる『ギネス・ブック』も第5位にエントリーされている。

有名な文学作品としては第15位にダニエル・ディフォウ (慣用的表記では「デフォー」) の『ロビンソン・クルーソー』、18位にメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』、20位にR・L・ステイヴンソンの『宝島』、21位にJ・R・R・トルキーンの『ホビット』、22位と23位にそれぞれマーク・トゥエインの『トム・ソーヤー』と『ハックルベリー・フィン』といった作品が含まれている程度だ。『アリス』も『ナルニア』も『ハリー・ポッター』も入っていない一方で、フィリップ・ブルマンの『北極光』 (17位)、ダレン・シャンの『血の獣』 (60位) といったファンタジー作品が含まれている。ロアルド・ダール作品からは『チョコレート工場』でも『マチルダ』でもなく自伝『少年』が106位に選ばれている。珍しいのは26位にランクされているカズ・キブイシの『フライト』である。こんな作家は知らなかったので調べてみたところ、1978年東京都出身の米国で活躍する漫画家とのことだ。(キブイシなどという苗字が日本に実在するののかと思ってこれも調べたが、「木部石」と書くらしい。) また161位に青山剛昌の『名探偵コナン』が入っている。

『タイムズ』の記事によれば、このリストは自身もかなりの読書家であるジョンソンが個人的に作成したものらしい。並べられている作品の是非には色々と意見もあるだろうが、このリストはあくまでもきっかけに過ぎず、ここから少年たちが本の面白さを覚え、自分の好きな作品を自分で見つめられるようになればよいということなのである。

(安藤 聡)

中国

「貝晶歓迎妮」に秘められた意味とは

中国語でオリンピックのことを「奥林匹克運動会 (Ào lín pǐ kè yùn dòng huì)」、略して「奧運会 (Ào yùn huì)」と言う。すでにご存知のこ

と思われるが、来たる2008年、8月8日から8月24日までの間、中国の首都・北京でオリンピックが開催される。

オリンピックにはマスコットキャラクターが付き物であるが、北京オリンピックにおいても、昨年の末頃だったか、今年に入って間もなくの頃であったか忘れてしまったが、五匹のかわいらしいマスコットキャラクターが発表された。その名をそれぞれ「贝贝 (Bèi bei)」「晶晶 (Jīng jīng)」「欢欢 (Huān huān)」「迎迎 (Yíng yíng)」「妮妮 (Ní nǐ)」と言い、総じて「福娃 (Fú wá)」と呼ぶそうだ。「娃娃 (wá wa)」は「お人形」の意であることから、「福をもたらすお人形」とでも訳せようか。

「贝贝」は、頭に水中を自在に泳ぐ魚模様のかぶり物を身につけており、それは中国の新石器時代の土器に画かれた魚の図案をイメージしたものだと言う。また、水の青色から五輪の中の青色の輪を象徴する。

「晶晶」は、無邪気で愛くるしいパンダをモチーフとしたキャラクターで、頭にはハスの花びら模様のかぶり物を身につけている。それは宋代の磁器に好んで画かれるハスの絵をイメージしたものだと言う。また、パンダの黒色から五輪の中の黒色の輪を象徴する。

「欢欢」は、頭に真っ赤に燃える炎を模したかぶり物を身につけており、それは敦煌の壁画に画かれた炎をイメージしたものだと言う。また、その炎はオリンピックの聖火を象徴し、その赤い色から五輪の中の赤色の輪を象徴する。

「迎迎」は、頭にチベット高原を駆けめぐるカモシカをイメージしたかぶり物を身につけている。また、チベット高原の大地の黄色から五輪の中の黄色の輪を象徴する。

「妮妮」は、頭にツバメ模様のかぶり物を身につけており、それは北京の空高く揚がるツバメ型の凼をイメージしたものだと言う。ちなみに、今の北京を中心とした一帯の地は、春秋戦国時代には「燕^{えん}」という名の国が治めていたこともあり、北京もまたかつては「燕京^{えんけい}」と称された。また、ツバメが舞う頃に鮮やかになり始める草木の緑から、五輪の中の緑色の輪を象徴する。

ところで、この五匹のマスコットキャラクターの名前には、ちょっとした工夫が施されている。実は、名前の一文字ずつを順番に並べると、「贝贝欢迎妮 (Bèi jīng huān yíng nǐ)」となり、声調はやや異なるものの、発音がほぼ「北京欢迎你 (Běi jīng huān yíng nǐ)」に通じ、「ペキンはあるあなたを歓迎します」という意味を暗示するといった仕掛けになっていたのである。(矢田博士)

韓国

韓国人の住宅購入資金

^{サムソン}三星経済研究所が、2007年第2四半期の「消費者態度調査」とその付加調査「家計の資産および負債運用調査」の結果を5月6日に発表した。ここでは、後者のうち家計の負債に関する内容の一部を紹介したい。

調査は、全国1000世帯を対象に、20才以上の男女に対する電話インタビューにより実施された。その結果、負債があると回答したのは全体の52%で、借金した目的は以下の通りである。

住宅購入のため：50.2%

事業資金調達のため：26.3%

消費のため：22.5%

チョンセ (注1) 資金のため：0.8%

年齢別に見ると、住宅購入目的は、20代と30代が他の世代より多く (60.9%と62.0%)、事業資金調達目的は、40代と50代が他の世代よりも多い (28.8%と31.4%)。

いずれにしても、どの年齢層も住宅購入を目的に挙げた回答がもっとも多いのであるが、では、住宅購入のためにどの程度の借金をしたのであるか。以下は、住宅購入を目的に貸付を受けた当時の住宅価格に対する借入金の比率と、その回答率である。

20%未満：34.4%

20～40%未満：45.8%

40～60%未満：16.0%

60～80%未満：3.8%

筆者は、インターネット上のニュース記事でこの数字を見た瞬間、我が目を疑った。「そんなバ

力な、間違いじゃないのか！」筆者が12年前に住宅を購入した時（もちろん日本です）、購入価格に占める借金の割合は80%に近かった。ニュース記事のひとつで、比率が60%を超える3.8%について「強心臟강심장」と表現していた。「おれは強心臟だったのか？」

ともかく、上の数字で、20%未満と20～40%未満の借金で購入した人の割合を足すと実に80.2%にもなる。きちんと調べたわけではないが、日本であれば考えにくい数字ではないか。しかも、韓国では現政権の不動産政策の失敗のために、住宅価格が高騰し、バブル状態にある。この調査では住宅を購入した時期は分からない。それ以前に購入した世帯が圧倒的に多いのかもしれない（注2）。それにしても、本当にその程度の借金で買えるのか。そこで、念のために、三星経済研究所のホームページにアクセスし、会員登録をして調査報告書の実物（電子版）をダウンロードした。それを見ると上の数字に間違いのないのである。

その報告書をさらによく見れば、住宅購入のために借金をしたとの回答は、住宅を保有していると答えた862世帯のうちの262世帯にすぎない。住宅保有者に対する、住宅保有時に資金をどのように準備したかについての質問があり、その回答は次のようになっている。

預金等、金融資産：54.6%

借入：25.9%

他の不動産処分：16.1%

遺産：3.4%

年齢別では、20代と30代が借入に頼る割合が高いとはいえ、それでも前者が34.0%で後者が34.5%にすぎない。これら年齢層でも金融資産によって購入した割合が48.9%と49.4%で、ほぼ半分を占めている。このこともまた、日本では考えにくいのではないだろうか。日本では借入に頼る割合が圧倒的に高いはずである。

一方、別の調査結果、すなわち国民銀行研究所が昨年12月に発表した2006年度の「住宅金融需要実態調査」（都市部に住む2000世帯が対象）報告書によると、最近3年間に購入した住宅の平均購入金額は2億753万ウォン（約2700万円）で、購入世帯の62.4%が金融機関から平均7202万ウォン

（約940万円）の融資を受けたとなっている。購入価格に対する借入の割合は約34.7%となり、三星経済研究所の調査結果、すなわち20～40%未満が最多の45.8%を占めていることと符合している。しかし、購入に際して融資を受けた世帯の割合は三星経済研究所の25.9%に対して、国民銀行研究所の62.4%と大きな開きがある。後者の場合、最近3年間に購入した世帯のみが対象であることからくる違いであるかもしれないが、正直に言って筆者にはよく分からない。

念のために付け加えておけば、平均購入価格の2億753万ウォン（約2700万円）は日本人から見れば安く見えるが、次のことを考慮する必要がある。すなわち、日本人と韓国人の一人当たりの所得は米ドル換算で3万7180ドルと1万3980ドル（いずれも2004年）で、約2.7倍の開きがあるということである。このことを考慮すれば、韓国人が2億753万ウォンの住宅を購入するということは、日本人が7200万円くらいの住宅を購入する感覚に等しいであろう。ようするに、日本人から見れば安く見えようと、韓国人から見れば決して安くない、というよりも非常に高いのである。

日本での同種の調査結果を参考にしたり、住宅購入資金の貸付制度などについて日韓での違いを調べてみないとはっきりしたことは分からないが、住宅購入の資金調達に関して両国の間で大きな違いがありそうである。

（注1）チョンセ：「不動産の所有者に一定の金額を預けてその不動産を一定期間借りるときの関係をいう語。家賃を月々支払う必要がなくその不動産を返すときは預けた金の全額が返済される」（『朝鮮語辞典』小学館）

補足すれば、これは韓国独特の賃貸制度で、家主は預かった金を運用して、その運用益が家賃となる。

（注2）本体の「消費者態度調査」報告書によると、現在は住宅購入に適切な時期かの問いに51.0%が「若干悪い」と答え、6.2%が「大変悪い」と答えている。

（田川光照）